《巻頭特集》

法学部40周年記念対談「法学部40年を振り返って」

坂本　仁
小池和彦
早川　誠
（司会・まとめ）

本対談は、熊谷時代からの法学部の様子を知る坂本仁教授、小池和彦教授にお願いし実現した。ただし、新型コロナウィルスの蔓延により対面での会議が制約された２０２１年秋の企画となったため、大学で用意されているオンライン・ツールのMicrosoft Teams上で、グループ・チャットを用いての対談となった。チャット対談の開始は２０２１年９月27日で、11月中旬まで続けられた。異例の授業・校務形態で忙殺される中、貴重なお時間を割いていただいた両先生に心より感謝申し上げる。なお、内容や文体については、早川の責任で整除し、お二人に御確認いただいた。また、対談後にデータベース等で調べて確認した事柄については、［　］に入れて付記してある。このように多少の加工はあるが、それでもやり取りの雰囲気や内容は損なわれていないと考えている。（早川）

早川　小池先生と坂本先生から、特に私が入職以前の法学部や熊谷の様子を中心にお話しをうかがえるということで、楽しみにしております。話のきっかけに、私の思い出話からしていきたいのですが、私が初めて熊谷のキャンパスを訪れたのは、１９９９年の採用面接の時だったと思います。季節は思い出せないのですが、採用スケジュールからいって夏の初めから秋頃でしょうか。その時のキャンパスは、高層２棟のユニデンスはもうできていて、陸上競技場から道を挟んだところにはパソコンルームを備えた建物がありました。広々とはしていましたが、でもやや寂しいかな、という感想でした。小池先生が勤め始められた頃は、キャンパスの印象はどんな感じだったのでしょうか。

小池　私が入職したのは、１９８４年４月です。法学部暦的に言えば創部４年目、法学部の一期生が４年生になったときでした。初めて熊谷キャンパスを訪れたのは、その前年の晩秋の頃でしたでしょうか。ちょうど西ドイツとの交換留学から帰国した直後で、やはり採用面接の時でした。遅れてはいけないと、かなり早めに到着し、広大なキャンパス内をうろうろいたしました。法学部は、キャンパス入り口左手から奥、今のアカデミック・キューブ方向に延びた長い建物にありました。今は２００９年から２０１０年の熊谷再開発の際に半分程度になりましたが、熊谷・教養部開設当時からのいわば記念碑的な建物です。その３階に、法学部が置かれていました。

ただ、奥にもまだまだ野球場などの施設があることは気づきませんでした。また、入口から見て右手の方には、赤い屋根の八角形の食堂棟など短大の校舎が広がっていました。とても広々としていた、というのが第一印象でした。

今早川先生がおっしゃったパソコンルームを備えた建物には当時まだ学生食堂の建物が付属しており、そこで学

生と一緒に昼食を取った記憶があります。そう言えば、先生と初めて仕事をしたのはそのパソコンルームだった記憶があります。確か、履修登録のパソコン処理だったでしょうか？　お若かったですね！

早川　パソコンルームの建物、名前はなんて言いましたっけね……。情報処理棟かな？　あそこに食堂があったのですか。私は、それは全然知りませんでした。就職当時は生きていくのに必死だったので、先生との最初のお仕事も全く記憶にないです。というよりも、その当時の数か月記憶がほぼない状態です。すみません……。

法学部の研究室が、今のゲートプラザの3階にあったということは、故清水千尋先生からうかがったことがあります。私が入ったころは、単に1号館と言っていて、おっしゃるようにアカデミック・キューブの方にもっと長く延びており、1階先端に2つか3つ、３００人程度収容の大教室があったと思います。3階の小さな部屋は、小教室としてゼミなどに使われましたよね。建築家の槙文彦氏による建物で、昭和43年度の第10回毎日芸術賞・建築賞を受賞したと、『立正大学の１２０年』にあります。私には未知のことなので、3階に法学部研究室があった頃の様子をもう少しお聞きしたいです。ちなみに、私は最初17号館（2号館と博物館の間）の2階の研究室（確かその前は坂本先生の研究室でした）を与えていただき、その後数年して2号館の3階に移りました。

小池　今は、ゲートプラザというのでしたね？　そうそう、昔は、単に1号館と呼んでいました。1号館は東西にかなり長い建物でしたが、熊谷キャンパス再開発で、約半分に削られてしまった。古くからの先生方からは惜しむ声も聞かれました。

法学部は、その今のゲートプラザ（旧1号館の東側部分）の3階にありました。階段を上った3階のいわば入口

（廊下）の上部には、「法学部」と揮毫された額が掲げられていました。『法学部の歩み』（昭和63年発行）３ページには、その状態の写真があります。よく見ると、額の上に天井が写っているのです。注意深く見ないと気付かないかもしれません。この冊子は、記憶や記録が散逸しないうちにと父兄会の協力をえて刊行されました。カラー写真は『立正大学の１４０年』にも載せてあります。

ここに法学部あり、とのいわば表札・看板がほしいということで、急遽、作成されたと聞いています。確かに、これがないと、法学部がどこなのか、迷ってしまいます。私自身、初めて訪問したときには少し迷いました。

この額が実際に掲げられていたのは、ここだけであり、また、この時期だけでした。法学部が品川の８・９号館に移ってからは、学部長室に保管されているはずです。『１４０年』の写真は、熊谷アカデミック・キューブ時代の法学部長室で撮影しました。数少ない法学部草創期を知る生き証人のようなものですね。揮毫したのは初代法学部長大澤正男先生だと、ご本人からうかがったことがあります。

早川　『法学部の歩み』もＰＤＦファイルでお持ちいただいてありがとうございます。このように記録が残されていても、なかなか残されていること自体を知らないままに過ごしてしまうので、後輩にとってはとても貴重です。

私が入った頃はもうすでに2号館がほぼ法学部の建物になっていて、1号館研究室時代はまったく知らないのですが、この頃は、授業とかゼミは、やはり1号館内の1階や2階でやっていたということでしょうか。今のアカデミック・キューブで、研究室階から下の階に降りて授業をするような感じと思えばいいのでしょうか。それから、まだバスも本数がなかったように思いますし、（現在の高層の）ユニデンスもないとカラオケ・ルームもなかったと思うのですが、ゼミコンパとかはどうしていたのでしょうか？

小池　大学の近辺では当時も「すみれ食堂」など、ごく限られておりましたので、バスで熊谷の町に繰り出すことがほとんどだったと思います。

当時の1号館3階の様子をもう少しお話しすると、入口の左側（南側）には、まず法学部事務室、応接室、学部長室、法制研究所長室がありました。もしかしたら、応接室と法制研は兼用だったかもしれません。その反対側の右側（北側）には、法学部資料室、会議室、学部談話室がありました。

研究室があったのは、これらの先です。左右（北側と南側）に、同数ずつ、合計14室くらいだったでしょうか。研究室の広さは基準以上でかなり広かったと思います。個室だったのは比嘉先生までで、私は清水先生の研究室に入れていただきました。三林先生は星野先生と同室でした。全員に個室研究室が与えられたのは、8号館［アカデミック・キューブができる前に法学部が入っていた2号館は、建設当初は8号館と称されていた］に法学部が移ってからです。

法学部事務室は、南向きの広い窓がとられており、そこから図書館や桜並木・森林を臨むことができました。個人的には、学生受付カウンターからの眺めはお気に入りの一つでした。写真を撮っておけばよかったと思っています。

教授会は、事務室の向かいの資料室か会議室で行いました。かなり狭かった印象があります。

また、学部談話室は、経営学部や経済学部の先生方もよく利用されていました。法学部は、経済学部や経営学部の定員から各１００名を割っていただいて誕生したという経緯もありますし、法学部の先生方の大半がもともと両学部いずれかの出身者でした。逆に、そのよしみで、私も大崎校舎（現品川校舎）に出校するときには、経済・経営の談話室を当然のように利用させていただきました。

（大崎の）経済・経営の談話室は、昔の図書館の一つ上の階、確か5階だったのではないかと思うのですが、そこにありました。その談話室は、経済・経営の研究室の真ん中に位置していたので、談話室にいれば、容易に経済・経営の先生を捕まえてお話しすることもできました。その流れで飲みについていったこともあります。

応接セットが2セット置かれていて、そうそう、そこでいつでも手合わせできるように囲碁・将棋盤もありました（笑）。藤田学先生、三辺博之先生、小林栄吾先生などなどが碁を打たれていました。岩井昭二先生は将棋でしたね。当時の様子を懐かしく思い出します。

教員同士の交流と言えば、こんなこともありました。法学部研究室が、1号館から8号館（現熊谷2号館）に移る前の話です。法学部や経営学部にはゴルフのお好きな先生が結構いらっしゃいました。そのため、日程を調整し、学部合同で、ゴルフコンペを開催したことも何度かありました。メンバーは10名近くいたかと思います。私自身は三林さんとブービー賞を争ったことを覚えています。授業後、打ちっぱなしにゆき、「有隣館」に泊まり、翌日は授業、というパターンの日も年に数回ありました。職員の方ともラウンドしたこともありました。プロ並みの腕前の方もいらっしゃいました。

海外での思い出もあります。統一まで今少し前の西ドイツの時代にですが、夏休みに、ゲッチンゲン大学の清水先生を訪ねことがありました。大学や町を案内していただいたものです。別の年の夏でしたが、三林先生とはケルン大学とザールラント大学で合流し、その足で、フィレンツェにもご一緒したこともありました。彼が注文したTボーンステーキが今でも記憶に残っています。

坂本　法学部創設が１９８１年ということですので、私が立正大学の教養部にお世話になって5年目のことにな

ります。法学部の事務室や研究室の話題が出ましたが、それ以前には、本部棟（現ゲートプラザ）３階は、教養部教員の研究室でした。法学部創設と同年に、教養部研究棟（現熊谷17号館）ができて［『立正大学の１２０年』年表によれば１９８１年３月５日竣工］、跡地を法学部が使用することになったようです。教養部が利用していた頃には、あまり味わいが感じられない雰囲気でしたが、法学部が同所を利用するようになり、「法学部」という看板が設置されたり、事務室のカウンターやソファーなどが置かれたり、各研究室利用者のネームプレートが出ていたりする様子などを眺めると、少し格調高く見えたものです。春先には、法学部事務室の窓越しに濠に沿った桜並木が、現在ほど鬱蒼としているものではなく、まだ若木の初々しさを感じさせるものでした。

法学部研究室を包摂する現2号館ができて、かつての本部棟３階から法学部の先生方が移られたのは、いつ頃のことでしたでしょうか？　１９９５年に、教養部が改組になり、法学部を含む既存の５学部に教養部教員が分属することになりました。その際、教養部から法学部にお世話になったのは、私を含め10名。その内、体育や英語の教員が７名でしたから、法学部の先生方は、処遇や対応に苦慮されたのではないでしょうか。法学部が開設されても、教養部の教員の立場としては各学部対等で平均的な教育を施すという前提でしたから、１年から４年まで熊谷キャンパスで一貫した教育を施し、卒業生を送り出す、という法学部の独自性や教育上の苦慮というのは、実感がわきませんでした。ですから、その間の13年間は、法学部に対して特に深い感慨を抱くということもあり得ませんでした。ただ、教養部にいらした法学・社会学系の先生には、法学部所属に関する強い思い入れもあったかもしれません。法学部分属以前に駿河台大学へ移籍された栗山徳子先生だけでなく、また、金子勝・鈴木隆史先生や西田照見先生も、『教養部紀要』よりも『法学論集』に積極的に寄稿されていたようです。法学部への個人的な意識を強くするようになったのは、やはり、１９９５年以降ということになりますね。

キャンパスでの過ごし方と言えば、授業が終わったら車で家路を急ぐということがあり、あまり熊谷キャンパスのあちこちを散策したり、施設を探訪したりということはありませんでした。ですから定かではないのですが、法学部へ分属してのキャンパスの変貌としては以下のようなものだったと記憶しています。施設の充実やキャンパスの変貌が見られるようになりました。学生食堂はステラへ。学生寮はユニデンスへ。教室棟・研究棟はアカデミック・キューブへ。サークルボックスの改築。体育館はスポーツ・キューブへ。野球部練習場設置やラグビー場、武道場などの整備です。バスのロータリーの整備に伴い、キャンパスの佇まいが、時代に伴い、随分変化しました。

早川　本部棟は、法学部の前は教養部教員の研究室でしたか。それはまったく頭にありませんでした。教養部がずっと17号館で、本部棟は事務室以外教室のイメージでした。法学部設置の頃は、熊谷の組織構成が変わった時期だと思いますので、建物の使い方も随分変わったのですね。現2号館は、データベースで調べてみると、１９９１年竣工となっています。竣工当時は8号館（熊谷教育研究センター）とされていて、翌年に2号館（教育研究センター）と改称されたようです。私は新人の頃に「法学部研究室が入っているけれども、必ずしも法学部の建物というわけではない」と聞かされたのですが、研究室が入っているので実質的に法学部研究棟と呼ばれたようです。

ちなみに、教養部出身の先生では、政治学以外だと確か教養部長もされた生駒幸運先生もそうだったと思うのですが、最初の頃の教授会で丁寧に声をかけていただいて感激したのを覚えています。

小池先生のゴルフや海外の話も、面白いですね。三林先生のTボーンステーキは、ご本人のイメージ通りで（笑）。清水先生も世話好きでしたよね。ドイツで小池先生を案内している先生の姿が目に浮かぶようです。有隣館は、私の時にはもうユニデンスができていたので、ほぼ印象がないのですが、たぶん２０００年以前は良く使われていた

のでしょうね。

小池　生駒先生は私ももちろん覚えていますし、お世話になりました。出版記念だったでしょうか、都内のホテルで大きなパーティーがありました。ご自宅が比較的近く、有名なケーキ屋さんを紹介して頂きました。今もよく利用しています。

有隣館も懐かしいですね。木造の立派な建物です。移築したと聞いたことがあります。土屋さんご夫妻が管理人でした。お風呂の温度管理や湯量の管理が大変だったようです。夜はお弁当形式、朝は炊きたてのご飯をいただくことができました。そう言えば、一升瓶をボトルでキープしていた先生もいらっしゃいました。コミュニケーションの場にもなっていたと思います。

それから、法学部の研究室の前身は、教養部研究室でしたか。知りませんでした。熊谷の夏の暑さは日本一。だが、当時の研究室に冷房が入っていたかどうか記憶は曖昧です。扇風機、それも清水先生の私物をフル稼働させていたのはよく覚えています。熊谷の冬も厳しい。そんな熊谷だから、研究室の向き、すなわち北向きか南向きかは、大きな問題でした。文字通り「南北問題」と呼ばれていました。南側は、確かに窓も広く日当たりもよかったですね（笑）。教養部時代も問題になったのでしょうね。坂本先生の時には、冷房は入っていたのでしょうか。清水先生の研究室は北側で、抽選だったとうかがっています。

坂本　旧1号館（現ゲートプラザ）に教養部の研究室があったころは、もちろん冷房設備など無かったと思います。窓を開け放って扇風機を稼働させていたはずです。冬場は中ほどに大きな石油ストーブが置かれていましたが、3

人共用の部屋では全体に暖かさが行き届くには十分ではなく、個別に電気ストーブなどを用意して、机の付近を温める必要があったことを覚えています。ですから、教養部研究棟（現17号館）にエアコンが設置されているのを発見した当初は、感激したものでした。

小池　本部棟の教室部分は、3階にはゼミ室や小教室、2階には中教室、1階には大教室・階段教室で構成されていました。1階の通路は幅広く、2階まで吹き抜けになっており、ゆったりとしたデザインです。早川先生の言う通り、ゼミなら研究室と同じ階を横に移動し、授業なら階段で1階か2階に降りていくというイメージで、1号館でほぼ完結していました。事務室にも近く、研究室の使い勝手は良かったですよ。

ステラについてもお話ししておきます。ステラは、旧学生食堂に替わり建設されました。名前は公募です。位置はやや短大側（今の社会福祉学部）寄りに移されたと思います。入口からキャンパス奥まで貫く、今のキャンパス中央部分の道路が広めに確保されました。竣工したのは法学部一期生が卒業する直前でした。ステラ3階で法学部一期生のための卒業パーティーが開かれましたから、よく覚えています。通常、謝恩会といえば卒業生が主催するというイメージですが、一期生のそれは、むしろ、学部・教職員および後輩から「ごくろうさん」という意味合いもあったと思います。

というのは、一期生は当然ながら先輩がいません。法学部についても情報が無い。まだ友達もいない。教員も知らない。何を履修すればいいのかさえわからず、入学時に不安を抱え、やや寂しい思いもしたはずです。後輩の新入生（二期生）にはそんな思いを抱いてほしくない、そんな気持ちから後輩のためにオリエンテーション・キャンプの立ち上げに賛同・協力し、これを次の学年にも引き継いでいきました。もちろん、清水先生の熱血指導もあり

ましたが。オリキャンは、以降、学部の伝統行事として、「2年生」が中心になって、学部と協力しつつ実施されました。「3年生」はオブザーバー役です。新任の私には、この1期生に限らないのですが、学部草創期の学生と学部・教職員の間には、連帯感というか、なにか特別な共感する思いがあったように感じられました。美化しすぎかもしれませんが……。なお、熊谷キャンパス・ステラで卒業パーティーが実施されたのは、この時だけでした。

坂本　旧学生食堂とステラについて、少し捕捉いたします。初めの方に言及されていた「情報処理棟」の所に学生食堂があったのです。1階が食堂で、上の階に本屋やスポーツ用品や雑貨などを扱う売店が入っていたようです。「ステラが建設され、名前が公募」されたとありますが、その名称の案を出したのが、教養部でドイツ語を担当されていた日中さん［日中 鎮朗氏、１９８４年から１９９５年まで立正大学教養部専任講師・助教授］という方でした。斎藤昇前学長と親しくしていましたが、ステラ命名発案者としての痕跡を残し、法政大学へ転職されました。

小池　法学部の創設について、学部紀要のことも重要ですね。法学部の創設を目指して、「法学研究室」が設置され、その機関誌として「立正法学」が１９６８年（昭和43年）に発刊されました。その創刊号に石橋湛山学長と久保田正文学監の連名で「創刊を祝いて」なる一文が掲載されています。周知のとおり、その後「立正法学」は１９８１年（昭和56年）に法学部が創設されたのを機に、名称を「立正法学論集」（第15巻目からでしょうか）と改めた上で継続して、現在に至っています。通巻数は連続性を維持するためです。その最新のものが、この40周年記念号になりますね。

坂本　熊谷キャンパスの施設・設備の充実やリニューアルについてですが、これは大学組織の展開と深く結びついています。１９８１年４月に法学部が４年間一貫教育を熊谷キャンパスで行うということで開設され、しばらく各学部の教養課程１～２年次生と法学部生とが同キャンパスを利用することになっていたのですが、１９９５年に教養部が改組になって既存の５学部に分属されるに伴い、１～２年次生の多くが品川キャンパスに移行しました。そのため、その分のキャパシティーを埋める必要が生じ、１９９６年４月に社会福祉学部が、２年後の１９９８年４月に地球環境科学部が熊谷に設置されることになりました。施設や設備の変化には、こうした背景があるのです。隣接する短期大学が発展的に社会福祉学部になり、旧短大の校舎が現在の６、８、９号館となり、また、本学初の理系を含む学部として地球環境科学部が生まれ、実験棟と研究室を備えた現３号館が建設されたのでした。

その間に、ステラやユニデンスなども建設され、個人的には食事のとり方や場所が変化しました。ステラのカフェテリア内に教職員用の食事場所が用意され、昼食弁当が提供されるようになったため、それ以前は、弁当を持参して研究棟内でとっていたのですが、次第にステラ内で５００円のお弁当をとることが多くなりました。また、法学部に移籍してからは、ユニデンス隣接の「サハー」を飲食の場として利用することも多くなりました。

施設の充実には一長一短があります。最新の建物は、人を引き付ける魅力を秘めています。しかし、最新なものであればあるほど、その維持には経費もかさみますし、時とともに老朽化し、実入りより負担感が増すという問題点が付きまといます。古くなった男子の「新生寮」と女子の「白菊寮」を新たに統合した学生用の寮として、１９９６年にユニデンスＡ館とＢ館が建造されることになりました。熊谷駅から遠く、また、臨時定員増の受け入れのため学生数が増加したことで、キャンパス内に学生寮は必要でした。学びの場と居住空間とが近接するというアメリカの大学キャンパスの立地を彷彿とさせる要素も含んでいて、機能的にも充実したものとなるはずでした。

ユニデンスが建造された当初は、熊谷にしては高層の建物であるため、遠方からも目立ちますし、学生寮としては、エレベーターは言うに及ばず、ラウンジや簡易スポーツジムやカラオケボックスやローンドリーなどを備えた設備の充実ぶりから、テレビ局が取材に訪れるということもありました。しかし、今日では、定員増の期間が終了し、教養課程があったころの法学部を含む5学部の学生が品川キャンパスに移動となり、熊谷キャンパスの学生数が減少しました。それに伴い入寮者数が減少して、空き室が出る事態となり、維持経費が重い負担となっているようです。これには、交通事情が改善され、寮に入るより通学する方を選ぶ学生が増えたこと、アルバイトをする学生は、キャンパス内の寮から熊谷市内などのアルバイト先にバスで往復する不便をこぼす者も出るようになる、といった背景がありました。

ユニデンスには、教職員やゲスト用の宿泊施設も併設されています。先ほども話に出てきましたが、もともとはユニデンス近在に「有隣館」という宿泊施設があり、遠方から熊谷キャンパスに来られる先生方は、この部屋を利用されていたようです。この施設は、旧来の木造建築で建てられたもので、鄙びた旅館のような利用形態でした。共同の浴場や賄いの食事場所があり、寝所も複数の宿泊者による相部屋です。この共同宿泊施設では、食後、お酒などを呑みながら、学内外の問題などを話し合い、親睦や情報交換を行ったりしていたようです。利用されていた方は、ここに一泊とか二泊されて熊谷で教えて、自宅に戻られたようです。他方ユニデンスでは、シャワー付きの個室で、食事はサハーのカフェテリアを利用するので、プライバシーが増した分、親睦や交流の機会は以前ほど多くはないようです。法学部が提携の先鞭をつけたニュージーランドのオタゴ大学から来訪した方々は、このユニデンスの宿泊施設を利用していただいたのです。

バスターミナルが整備されて、見栄えも使い勝手もよくなりました。それまでは、ＪＲ熊谷駅と大学キャンパス

を往復するバス便しかなかったのですが、いつからだったでしょうか、東武東上線の森林公園駅と大学キャンパスを往復するバス便も運行されるようになりました。私は東上線沿線に住んでいるため、沿線の最寄り駅から大学までの公共交通機関がなかったので、熊谷キャンパスに出向くのは結構不便でした。どうしていたかというと、赴任当初の通勤には、東松山駅から熊谷駅行きのバスに乗り、荒川近くの村岡三叉路で下車、そこで熊谷駅からくる大学行のバスに乗り換え、大学までたどり着くという通勤形態でした。バスの乗り継ぎは、移動距離の割には手間と時間がかかり、仕方なく車の運転免許を取得し、マイ・カー通勤に切り換えることとなったのでした。それでも時として、雪道走行の危険を避けたいと思う場合や自分で車の運転をするのは面倒くさいと思うときには、森林公園駅から大学まで直通で運行されるバスを利用することができるようになったのは、ありがたいことでした。

早川　森林公園からの直通バスがない時代の話は、まったく存じ上げませんでした。あの道、そしておそらくさほど数が多くない便数を使ってのバス乗り継ぎは驚きです。私が入った頃は、あれでもずいぶん改善されていたのですね。

オタゴの話も懐かしいです。私は大学・大学院時代に留学経験がなかったので、英語圏への旅は坂本先生のサポートで後から合流したオタゴ大学での語学研修が初めてでした。２００３年の夏だったでしょうか。行きはうまい直通便がなく確か南島のクライストチャーチ乗り換えで行ったのですが、初めての海外空港での乗り換えでとても緊張したのを覚えています。国際法文化コースの学生たちは、少人数だったのでまとまりも良かったですね。当時は、法学・行政・国際法文化の３コース制を取っていましたが、国際法文化コースは英語教育に特に力を入れていました。

坂本　オタゴ大学への学生の語学研修には、早川先生に同行していただき、大学で講演をされたり、帰路、学生が予定の時間にホテルに戻らないという事態が発生した折には、サポートしていただき、随分お世話になりました。引率は一人では手に余りますよね。改めてお礼申します。

早川　とんでもありません。むしろ、あの経験をさせていただいたおかげで、そのあとすぐの２００４年の在外研修を何とかこなせたと思います。その意味では、私が御礼を申し上げるべきことです。学生たちの件は、遊び回っていて遅くなったという話ではなくて、帰路一泊した北島のオークランドで、夕食に出かけたレストランでたまたま料理が提供されるのに非常に手間がかかり、結果的にホテルに帰る時間が遅くなってしまったというものでしたね。責任者として坂本先生も大変ご心配されていました。問題なく全員無事に帰国できて、何よりでした。

坂本　話を熊谷に戻して、授業時間の苦労についても書いておきたいのですが、２００６年から、授業時間帯を品川（大崎）と熊谷両キャンパスで統一することになりました。それ以前は、品川では、1時限目の開始が午前9時、また品川では以前から夜間の時間帯もあり、最後の8時限目の終了が午後9時30分だったかと思います。熊谷では、東京方面からは「遠隔の地」ということで、1時限目の開始は午前9時30分［１９９７年からは午前9時20分に変更］、5時限目の終了は午後5時30分くらいでしたでしょうか。法学部の大学院が熊谷に開設されて、夜間の時間帯の最後の終了時間はいつだったでしょうかね。

1時限の開設時間も90分ではなく、85分程度、昼休みも30分程度、科目間の休憩時間も5分しかなく、ずいぶん慌しいものでした。学生ばかりでなく、連続して講義を担当される先生方は、大変だったろうと思います。

それが統一されるようになり、授業時間が1時限90分、科目間の休憩時間も10分、昼食時間も40分と変更になりました。変更の要因は、熊谷への交通事情が格段に改善されたことでしょうか。ＪＲが在来線だけでなく、新幹線も熊谷駅に停車するようになったこと、また、東武東上線からのバス便の利用が可能になったことが挙げられるでしょう。しかし、さらに大きな改正要因は、文科省に臨時定員増や新学部設置などの申請をするに伴い、授業時間や休憩時間の改善要請が出されたことが大きかったようです。「熊谷は遠隔の地」という名残として、両キャンパスで授業を担当される先生や熊谷キャンパス担当の非常勤の先生に支給される、熊谷出向手当てがありました。

品川・熊谷両キャンパスで授業の開設時間帯が一致することの利点のひとつに、法学部が4年間かけて段階的に品川キャンパスに移行する過程で、幾つかの科目を「リモート授業」で実施できたことが挙げられるでしょう。これは、先進的な試みとして評価される面もありますが、同一時間帯に両キャンパスに機器の整備や人員の配置をしなければならないために、随分経費が掛かったようです。

小池　そうでした。熊谷と品川（大崎）には当初、授業の時間帯の違いがありました。法学部ができた頃には、熊谷からのみならず、森林公園からもバス便があったのですが、双方とも本数は限定的でした。満員でした。加えて熊谷からのバス便は町中を通るルートでしたので、時間も相当余計かかっていました。乗り場も、北口から南口へと変更され、多少は早くなりました。学生も教員も、朝も、もちろん夜も、きつかったです。多くの先生が、有隣館、後にユニデンスを利用したと思います。学生のためにユニデンスを建設したのも、そんな理由があったでしょう。いかに熊谷キャンパスを活性化するか、大きな課題だったと思います。就職当時、車の免許を持っていませんでしたが、取ろうというきっかけの一つになりました。熊谷の自動車学校でしたね（某先生も当初二輪で通ってい

ましたが、車の免許を取りました）。非常勤の先生も大変だったことでしょう。熊谷関係者にとっては、時間統一は結構負担を伴い、熊谷キャンパスのいろいろな課題を再認識させられた気がしました。

５時限終了時間は、完全に忘れてしまいました。ともかく夕刻になると、熊谷はあっという間に学生の数が減り、特に冬場はさびしい感じでしたね。社会福祉学部や地球環境科学部が完成してやっと少し活気が出てきたでしょうか。

大学院（昼夜開講制・夜間主で認可）は１９９４年４月の開設でした。実社会で活躍している専門的職業人のリカレント教育や、より高度の専門的職業人の養成を主目的にしていたこともあり、昼間就業している社会人が入学し受講しやすいようにと、授業は当初、平日は午後４時５分から９時15分まで、土曜日は午前10時から午後９時15分まででしたね。統一後もほぼ同じ時間帯だったと思います。おそらく、ですが。院生の中には熊谷市役所の職員の方もいらっしゃいました。それに、長野からの通学者の方も。ユニデンスができてからは、院生も利用できるようになったと思います。

坂本　やはり、法学部の設立趣旨や発足からしばらくの経緯は、小池先生に頼らざるを得ませんね。

他方で、法学部の品川キャンパスへの移転には、私から若干の経緯説明が必要でしょうか。あくまで私の記憶に残る限りで、ですが。

１９９０年代東西冷戦が終了し、アメリカの新自由主義的考えの影響を受け、日本政府の施策も各方面に亘り規制緩和が実施されるようになりました。大学行政に関しては、それまで東京に本拠を置く大学が、学部新設やキャンパス拡充を検討する際には、「工場等制限法」なる厳しい制限が課されていたため、東京都区内での拡充は難し

く、各大学はやむなく神奈川や八王子や埼玉などの東京近在の地方に開設ないし拡充をせざるをえなかったのです。立正大学は経営学部新設に伴い、「１９６７年」に、熊谷の地を選んだわけです［理事会での熊谷校地の取得決定自体は１９６４年で、教養部開設が１９６７年］。ところが、２０００年以降、都会での「工場等制限法」が見直され、そうした規制が緩められたことで、東京に本拠を置く大学が、建物の高層化を図るなどしてキャンパスを東京に戻す「東京への回帰」現象が見られるようになったのです。

そうした時流に乗って、本学も大崎（品川）キャンパスでは、臨時定員増の枠や夜間学生の定員枠、文学部哲学科の心理系講座の枠などを使い学部再編を実行して、２００２年に心理学部が新設されることになったのでした。

法学部は１９８１年、熊谷に設置するということで認可され、その設立時の趣旨を尊重するあまり、半永久的に熊谷からの移動はできないのだとの固定観念が強かったのです。法学部の先生でも、品川移転の実現に懐疑的な方はいらっしゃいました。しかし他大学の動向や心理学部が大崎に新設されたこと、経・営両学部が四年間一貫教育を大崎で実施している実態などを見るにつけ、法学部も大崎キャンパス移転の望みを抱くようになりました。そうした働きかけや要望を大学執行部や経済・経営学部の理解を示す方々に打診したりしました。

当時は、髙村弘毅学長の時代（２００４～２０１０年）でした。髙村氏は文学部地理学科の重鎮で、この地理学科を改編して熊谷キャンパスに地球環境科学部設立に尽力された方で、法学部の品川への移転に対しては断固反対であり、移転はほとんど実現しそうもない情勢でした。当時、副学長のひとりだった経済学部の石田先生などは、そうした法学部の要望に理解を示してくださいました。何度か申請の起案書を提出いたしました。しかし、髙村学長からは認められないとのすげない返答でした。

ですが、後を継いだ経営学部出身の山崎和海学長の時代（２０１０～２０１６年）には、清水千尋元法学部長が

副学長として大学の執行部体制を支えており、その尽力もあって学長などを動かし、不可能と思われていた法学部の品川キャンパス移転が現実化することになったのです。経・営・法という社会系３学部は、分離して存立するのではなく、都市型学部として品川キャンパスに併存し、協力し合ってこそ学生の育成や魅力的なキャンパス運営を実現できるという主張をおこないました。大学としてその決断が下され、届け出が文科省から認可された時には、当初、半信半疑でした。この時の決定プロセスがどのように進捗したのかは、その場には居合わせませんでしたので、残念ながら具体的には分からないのですが。熊谷に取り残されるように感じた社会福祉学部や地球環境科学部からは、反対の声があがったことも耳にしました。粘り強い働きかけと、他大学のキャンパスも東京に回帰しているという社会の動向とも相俟って、２０１４年４月から、法学部が４年かけて段階的に品川キャンパスに移行する運びとなったのでした。

小池　公式に法学部の品川移転希望を表明したのは、坂本学部長でしたね。ただ、おっしゃるように状況はなかなか厳しいものでした。熊谷キャンパスの再開発の折も状況はあまり進展しませんでした。可能性が開けたのは、馬込・地下鉄車両跡地購入計画が持ち上がった時だったと思います。同時に、立正高校の馬込移転も決まりました。

坂本　そうでしたね。中高の馬込への移転により、品川キャンパスに空きができることで、法学部受け入れ態勢が整ったという現実的な要因がありましたね。中高移転を含めた品川キャンパス再開発計画という視点を考慮に入れないとなりませんね。

法学部の移転でもそうでしたが、学長選挙は大学の全体方針に大きな影響を与えてきました。もっとも、１９７

7年に教養部へ赴任してからしばらくは、学長選挙というものに、さほどの関心を抱くことはありませんでした。候補者はいずれにしろ仏教学部か文学部出身の方で、（私にとっては）入学式や卒業式などの儀式でお見掛けする彼方の方でしかなく、どなたが学長になられても大差ないと思われるもので、3年に一度訪れる選挙に出掛け、ただ選挙で選ぶ・信任投票するという感じでした。当時は、菅谷正貫氏が１９７１年から１９８３年まで都合4期12年務められました。（何時だったか、これもハッキリしないのですが）その間一度、教養部でも学長選に関心が高まったことがありました。それは、教養部所属で経済学を教えておられた浅田光輝教授が、候補者の一人として選挙に臨まれたことがあったからでした。（水面下では、いろいろあったのかも知れませんが）私などが選挙戦の運動をするとか集票行動に参加するなどということはありませんでしたが、投票結果には他学部からも少なからぬ関心が寄せられました。仏教・文学などの伝統的な学部の先生方は、投票行動に自覚的になり、学長ポストの既得権益を守るよう、結束を強めるという雰囲気が生まれたのを感じました。結局は、浅田学長が誕生することはなく、仏教学部や文学部出身の方が学長として選出されることが続きました。１９８３年からの学長も、文学部の中村瑞隆先生です。しかし、１９８８年の選挙では、法学部の大澤正男教授が初めて両学部以外から選出され、１９８９年から1期学長を務められました。大学行政の合理的で秩序立った運営を目指すといったような気概が感じられました。

以降の学長選挙は、それ以前の情勢とは異なり、選挙の公示期間には、それなりの投票行動の呼びかけなども熱を帯びるようになりました。大澤学長の次は、渡邊宝陽（仏）氏が返り咲き、次いで古西信夫（法）、坂詰秀一（文）、吉田榮夫（文→地球）、髙村弘毅（文→地球）といった面々が学長に就任されたのです。経緯を眺めますと、仏・文出身者とそれ以外の学部の方とが学長を交代し合うような選出形態となりました。（付言いたしますと、髙村氏が2期務めた後、経営学部出身の山崎和海氏が2期、文学部の斎藤昇氏が1期、次いで現吉川洋氏が学長を務められていらっし

ゃいます。)

早川　先日実施された２０２１年10月31日の学長選挙では、仏教学部の寺尾英智先生が次期学長に選出されました。仏・文出身者とそれ以外の出身者が交互に選出されるという流れは、今でも継続しているのかもしれませんね。

坂本　教養部が存在したころは、仏・文学部の構成教員と経・営・法の社会系３学部の構成員との数が拮抗するようになり、50名ほどの教養部教員の投票行動が学長候補の選挙結果を左右する面もありました。しかし、１９９５年に始まる古西学長時代に、教養部が改組となり、既存の５学部に教員が分属となると、分属先のそれぞれの学部の利害や動向に応じた投票行動が取られるようになった気がします。

学長に就任する方の出身学部が、１９８０年代までは、伝統的な仏・文学部で占められていたのが、１９８９年の大澤学長の誕生以降は、それ以外の学部を出身母体とする方と仏・文学部の出身者とが交互に学長に就任されるようになったのですが、それには、大学内外の情勢が大きく影響しているでしょう。

立正大学が時代や社会の要請に応じて、入学生の規模の拡大や学部の新増設を行うのに伴い、キャンパスの拡充を図ったこと（そのため熊谷キャンパス取得に関して、教職員の給与の遅配などが生じたこと）、１９８１年の法学部開設以降も、臨時定員増に対応する文部省への申請、１９９６年の社会福祉学部や１９９８年の地球環境科学部の熊谷設置、２００２年の心理学部品川キャンパス設置など、大学組織が大きく変貌したことが大きな要因として挙げられるでしょう。その間、面倒な文科省との対応に追われつつ、また、品川と熊谷という距離の解消を目指した第３・第４のキャンパス取得の計画などが沸き起こっては消えていきました。そうした計画立案に積極的だったのは、

伝統的な学部というよりは、新たな学部出身者から出てきたものでした。学長を始めとする大学執行部の立案策定能力や実行力が問われるようになったのでした。誰を学長に戴くのかは大学の命運を左右する、と思われるようになってきたのです。

長く在職し、年齢的にも高くなったということもあるでしょう。学長候補者選考委員会の法学部のメンバーとして委員会に臨むことがありました。各学部2名から構成され、学部長からの推薦を受け、小池先生と一緒に臨みました。候補者の推薦など所定の手続きを経て、委員会で候補者が確定し、選挙管理委員会に報告されるのですが、候補者が公示されるまでは、守秘義務があり内密にしておかなければなりません。そうした場を経験してからは、学長選挙も、就任したての頃とは印象が大いに異なるものとなりました。

早川　一つ、教養部のことでうかがいたいのですが、『立正大学の120年』152頁の教養部のところで、熊谷キャンパス開設当初は「原則として東京都と神奈川県にある高等学校の出身者は大崎キャンパスで学び、埼玉県をはじめとする他の道府県の学生は熊谷キャンパス」とされていて、それが「こうした経過措置も1981年教養部の熊谷移管完了と同時に終了した」という書き方がしてあります。これは、1981年になったところで、出身地に関わらず1・2年生全員が熊谷で教養教育を受けるようになった、という理解でよいのでしょうか。

坂本　断定的なことは云えませんが、おそらく示唆通りでよろしいのだと思います。それ以前でも、大半は熊谷で教育を受けていたのではないでしょうか。ただ、仏教学部は、熊谷キャンパスにまだ、実際上の修練の場が整備されていなかったこともあり、宗学科の学生などは熊谷に来ることはなかったのかもしれません。それに、大崎に

は2部・夜間部があり、都内の学生には夜間部の授業を受講するのを認めていたのかも知れません。私は語学担当でしたので、昼間部の学生が同じ授業に参加するという事態はあり得ませんでした。ですから、その点の事情は残念ながら、詳らかにできません。当時は、まだ、学生運動の名残があり、学生部長補佐などで、忙しかったので、そうした教学面の関心が薄れていたのかもしれません。ただ、キャンパスの正常化が進み、いつの頃からか、宗祖涅槃会など仏教行事にまつわる機会には、熊谷キャンパスでも仏教学部の坊主頭の学生を見掛けるようになり、それ以前には見られなかった珍しい光景として記憶に刻まれています。

小池　１９８１年と言えば、法学部のできた年ということですね。熊谷キャンパスの奥に、仏教学部の学生寮（日蓮宗の寮）ができたのも、その頃でしょうか。修行学生というのか、そうした学生の姿を何度か見たことがあります。

そのように既存学部の教養部が熊谷に集約され、法学部ができると、今度は逆に、というか、再度というか、既存学部の１・２年生を、大崎に移管（戻す）するという流れになっていくのですね。まず、仏教・文学部でしたでしょうか。ついで、経済学部。ついには経営学部も大崎へ移り、全学部が、大崎と熊谷で、それぞれ１～４年までの完結・一貫した教育を行うことになるのですね。心理学部は始めから大崎一貫、社会福祉学部・地球環境科学部・データサイエンス学部は熊谷一貫ですね。

こう見てみると、大学も大きくなりました。法学部も、です。当初昭和56年は２００人定員。昭和61年には３００人定員になりました。やや正確に言えば、定員は２３０人で、70人はいわゆる臨時定員でした。その後、臨時定員分が恒常化したので、正真正銘３００人定員。昨年度から、３４０人でしょうか。臨定といえば、あの頃は、18

歳人口が増えていた時期です。応募者数も大学全体で1万人くらいあったでしょうか。その頃の入試で記憶にあることと言えば、①入試終了後に、混乱や事故防止のため、受験生について（今の大崎正門の階段のところで）階段規制をしたこと。②東京ドームで入学試験を実施したことですね。

早川　坂本先生、ありがとうございます。とりあえず、仏教学部については、『１２０年』（１２８頁）に、「昭和56年度、仏教学部生も教養課程を熊谷校舎で受講することになった」という記述があるので、それまでは大崎ですか。宗学科は、谷中の日蓮宗学寮に入っていたので、熊谷には来られなかったようです。そこで、小池先生の御指摘通り、昭和56年、つまり１９８１年3月に、熊谷に仏教学部用の熊谷学寮が竣工しました。

大崎４年一貫化は、私の入職後なので、覚えています。今度は『立正大学の１４０年』を見ると、２０００年からは臨定の解消段階で、夜間主コースの志願者の減少も予想されていたので、それへの対応も目的だった、と。２００１年に経営が2年生から大崎での履修を開始、２００２年に経済・経営が大崎４年一貫化、同年7月に工場等規制法が撤廃（この年の4月に心理学部開設）、２００６年に文学部大崎回帰、２００７年に仏教学部大崎回帰、というタイムラインです。東京ドーム入試は大学史年表だと、１９９０年2月、１９９２年2月に記載がありますね。

小池　清水先生が執筆された学部通史によると、法学部認可が１９８１年の1月（16日）、入試が3月で、応募者２００５名、志願倍率10倍。よくこれだけの数を集めたと思います。高校廻りもしたと聞いた覚えがあります。私自身が創部5年目で入試委員をやったときには、清水先生がまだ在外研修でご不在。大変でした。記録を見ると、昭和61年（創部6年目）には競争率は5・4倍と、史上最低を記録しています。この記録は未だ破られていないので

は（笑）。入試委員2年目で、おちこんだ記憶があります。清水先生が戻り、三林先生が加わってからは、募集活動を強化できたので、倍率9倍と盛り返しました。

法学部の入試は当初から、推薦入試（指定校制）、一般入試1期、2期、および、社会人特別入試の4つでした。一般入試1期の受験科目は英・国・社の3科目入試（昭和63年から数学を、社の代替科目として採用しました）。2期入試は、国・英の2科目入試です。ただし、英語重視の配点を採用していました。社会人入試も数名の応募ではありましたが、いらっしゃいました。その学生は、記録のみならず記憶にもしっかり残っています。

坂本　学生定員や在籍者、入試などを確認する際に、今では「立正大学基本統計」というのは、継続して作成されていないのでしょうか。各学部学科の学生定員数や基本的な入学者数、それに応じた所属専任教員数、また学費や財政面などの、それこそ基本的な年次統計が一覧表になった冊子です。実はこれは、かつて教養部にいらして分属先として経済学部に移籍された川上義夫先生が、尽力されて率先して作成されたものです。何年に学生数がどう変動したのか、各学部の教員数や学部配布金はどのくらいか、といった数値や推移が一目で分かる大変便利なものでした。総務課か学長室かでそれを受け継ぎ、作成されることになりました。初めの頃は、年を重ねるごとに、統計項目が拡充されていき貴重な資料といえるものでした。それが毎年全専任教員に配布されていたと思うのです。しかし経費が嵩むからか、利用される熱心な読者がそう多くなかったからなのか、15～16年程前（髙村学長時代の加藤副学長がいらした頃でしたか）から配布されなくなりました。配布はされなくとも、総務課とか大学執行部とかで統計自体はしっかり記録され作成されているはずだと思うのですが。

早川　基本統計は、たぶんデータとしてはあるのではないかと思います。あるいは、認証評価用のデータとして少し違う形になっているかもしれませんが。

坂本　自分が経験した学部長会議のこともお話ししておこうと思いますが、ある時点から学部長会議を品川キャンパスばかりでなく、熊谷キャンパスでも開催するようになりました。それ以前は、学部長会議は当然大崎（品川）キャンパスで開かれていたはずです。教養部が改組され、大学執行部の本拠が品川に集中するようになり、熊谷キャンパスは付属の位置付けになり勝ちです。しかし、法学部だけでなく、社会福祉学部や地球環境科学部など複数の学部の学生が4年間熊谷キャンパスで教育や生活を営むようになると、それに応じた配慮も当然必要となります。ですが、設立順に4学部が品川に本拠を構え、教育方針や設備の充実などに品川中心に関心を傾けるようになると、当然のことながら、熊谷キャンパスの立地や設備の問題を含め、親身になって熊谷の抱える問題に対処する熱意など失せるものです。品川再開発の計画やブランディング策定に意識が傾注されていたころには、熊谷キャンパスに再投資することへの反対意見も品川の教員に強かったと聞いています。

そうした傾向に鑑みてでしょうか、恐らくは髙村学長の頃からかもしれませんが、月2回の学部長会議が原則、品川と熊谷とで交互に開催されるようになったようです。ただ、月1回、熊谷で学部長会が開かれるようになったから、熊谷問題が認識されるということでもないでしょうが、実地検分をすることがなければ、そこで抱える問題は認知されることさえないでしょう。ですから、学部長会議が熊谷キャンパスでも開催されるというのは、熊谷キャンパスを等閑視できないという、それなりに有益な機会であると言えるでしょう。

また、それに即応するかのように、大学執行部構成メンバーである副学長や学内教学面の理事を選出するにあた

っても、品川学部と熊谷学部からそれぞれ1名ずつ選出される、というのが慣行となっているようです。

早川　先ほど一期生の話のところで、オリエンテーション・キャンプの話題が出ましたが、これについて少しうかがえますでしょうか。今ではなくなってしまった行事ですので。

坂本　１９９５年に教養部から法学部へと移籍になり、教養部にはなかった行事として驚きを覚えた体験の中の一つが、新入生の「オリエンテーション合宿」(「オリキャン」)でした。

入学式を終えて、一日二日後に、法学部の新入生および専任教員のほぼ全員が、熊谷キャンパスから10台くらいバスを連ねて軽井沢プリンスホテルまで、一泊二日の研修に出掛けるのでした。目的は、新入生が大学生活を円滑に行えるようにするためのオリエンテーションです。ホテルに到着後、法学部の教育方針を全体で確認後、グループに分かれて、科目の履修方法、時間割の組み方といった就学面の指導をするのです。また、バスの移動の間やホテルで立食パーティーや宿泊生活を通して、教員と学生の触れ合い、および学生同士が友人を見つけたり、集団生活のマナーを身に着けたりする機会を提供するのです。自分の大学新入生のころを思い浮かべ、実に懇切丁寧な指導の場だなと思いました。当時、法学部だけでなく、経営学部も同時期に同じようなキャンプを実施していたようです。

そうした運営がスムースに行えるよう、代々法学部の上級生による「オリエンテーション・キャンプ運営委員会」(「オリキャン委員会」)が組織されており、彼らが事前に会議を重ね、スケジュールや方針の確認をしたり、事後に反省点などを話し合ったりして、そのノウハウが後の世代に受け継がれてきているようでした。この委員会の

メンバーの中には、学年を重ねて「ゼミナール協議会」（ゼミ協）のメンバーになる学生もいたようです。「委員会」を通して、「ゼミ協」の組織活動のノウハウや人脈作りを身に着けるようになるのでしょう。大学全体で言えば、サークルとは異なるものの、体育祭や学園祭実行委員会のような重要な役割を果たしていたようです。学部卒業式の時には、そうした彼等（「オリキャン」や「ゼミ協」）の顕彰の機会を設けていました。この組織は、小池さん、清水さん、三林さんなどが築き上げてきたのではないでしょうか。

しかし、今では「オリキャン」の方は実施されなくなりました。オリキャンの費用がかさみ、初年度の納付金が新入生の負担になること、入学年度の学生の参加の熱意やマナーなどが問題になる事態が発生したり、年度当初の繁忙期に、専任教員の引率負担が相当なものになること、学部予算の配分も考慮したりしなければならないなど、学生サーヴィスへの利点だけでなく、費用対効果を勘案すると継続の必要性を検討しなければならなかったのでしょう。廃止決定の時期はあいにく研修中で、その経緯は分からないのですが、その翌年度からは、法学部の「オリキャン」は中止となり、大学内でのオリエンテーションのスケジュールに準じて、キャンパス内で履修指導をするようになりました。ちなみに経済学部は元々そうした仕組みを用意していませんでしたが、同時並行的に実施していた経営学部も大崎で四年間一貫教育を実現するようになり、オリキャンは行わなくなったのではないでしょうか。

「オリキャン委員会」が活動停止となり、そのメンバーの何人かが参加して構成するゼミナール協議会は、メンバー作りや運営方針などを策定するうえで、「オリキャン委員会」の運営の仕方が継承されず、「ゼミ協」自体で工夫せざるを得なかったため、当初、苦労があったのではないでしょうか。今では、「ゼミ協」という名称も変更になったのでしたか。

早川　オリエンテーション・キャンプは、坂本先生の時には既に軽井沢でしたか。『法学部のあゆみ』だと、1983年は「りんどう湖」と記載があるので、那須でしょうか。私が入った時には、新入教員には学生に親しんでもらうのが最優先ということで、ヘルパーとゼミ協の担当教員を仰せつかりました。オリキャン委員会の学生たちのことは、「ヘルパー」と言っていましたよね。オリキャンが終わった後も、新入生にもわかりやすいように、年度当初は学校で自作デザインのパーカーを着ていたと思います。私も何回かヘルパー担当をした際に、学生たちと同じデザインのものを買って（学部予算から出ていたでしょうか?）着ていました。今でも、研究室のロッカーにとってあります。数年前、教員1年目に面倒を見た学生の一人（ヘルパーとゼミ協と両方やっていた学生です）から卒業以来の連絡をメールでもらい、何となく当時のことを懐かしく思い出しました。まだこちらも若く学生の合宿の雰囲気も好きだったので、楽しい仕事の一つでした。

小池　私の就職後の最初の仕事も、このオリキャンでした。新入生の雰囲気が、オリキャンを境にパッと明るくなったことに感動しました。冊子にもあるとおり、新入生が、一日も早く法学部生としてスタートを切り、今後の4年間の有意義な大学生活を送ることができるように、①新入生が、同級生・上級生・教職員との交流を図ることができること、②法学部4年間の履修や就職・各種の資格取得などに必要な情報を周知徹底することを目的に企画されたものです。私にとっても、新人研修の場であった気がします。当初のオリキャンは那須（ビューホテル）でした。会場探しには苦労しました。予算（学生納付金）が限られていたことと、全体集会（300人前後）と15名程度のグループ・ミーティング（GM。15名程度×20）をまかなえる施設が、熊谷近郊にはなかったからです。バス移動のために、バスレク（バス・レクリエーション）なるものも、ヘルパーが工夫したものです。ディズニーランド

近郊（初めて現地集合解散）でも実施しました。

早川　学生もそうなのですが、当時は熊谷という地理的条件の中で、教員間での親睦を深めるのも大変でしたよね。私自身も、懇親会の幹事を任されたことがありますが、皆さんやはり以前からそうした機会を積極的に作られていたのでしょうか。

坂本　当時の法学部専任教員の親睦会も濃密なものでした。年度末に一泊二日の宿泊を伴うものでした。１９９５年は、教養部から10名ほどの教員を迎えるということで、（幹事を務められた鍋澤先生の話では）法学部創設のときに実施したのだという、秩父で開かれました。列車や車などを利用して各自で目的地に向かい、温泉などに浸った後、夕刻から親睦会となります。エネルギー溢れる方たちは食後も、アルコールを嗜みながら、カラオケで自慢の歌声を披露したり、夜遅くまで熱心な議論を戦わせたりしていました。以降、毎年年度末に、幹事を決めて熱海や箱根の温泉地で実施されました。お互いの趣味や関心などを交えて歓談し、親交を深めたようです。そればかりでなく、大学の運営方針を巡って深刻な話し合いなども行われたようです。こうした機会を重ねるにつれ、次第に、プライベートでも温泉に行くのが楽しみになりました。

こうした形式の親睦会は、法学部創設時のメンバーがほぼ退職された頃に廃止になりました。その代わり、構成員の若返りがなされたことにより、卒業式当日、式が終了し、学生との「お別れ会」の合間に、食事をとりながら歓談するという合理的で簡素な方式に変更されました。時代の趨勢で、年度末と年度初めは、ますます教職員の繁忙の度合いが増してきています。宿泊での親睦会を開く余裕はもうないでしょう。

小池　そうでした、そうでした。甲府（石和）、那須、伊香保にも行きましたね。私も、幹事をしましたよ。結構大変でした。早川先生も、確か箱根塔ノ沢で幹事、でしたね。先生方はそれぞれ十八番があって……。気も使いましたが、楽しかったです。（前にも言いましたが）懇親会の翌日にゴルフコンペを実施した年もありました。

早川　私が懇親会の幹事をしたのはどこだったか自分でもはっきり覚えていないのですが、箱根方面だったのは間違いないと思います。でも、ああいう飲み会というか懇親会が成立するというのは、坂本先生のおっしゃるように、もう過去の話でしょうね。幹事の負担から考えても、飲み会文化の退潮から考えても、今は無理でしょう。

坂本　最後に、法学部の専任教員として在籍された方達の中で、記憶に残る方々を少し振り返ってみることにします。法学部に以前からいらして、停年を迎える前に、残念ながら病を得て他界されたのは、松元忠士先生（憲法）と、岩井先生（政治学原論）の後に法学部長を務めたり山崎学長時代の副学長も務められたりした清水千尋先生（民法）。また、退職後程なくして他界された方々に、立正大学学長を務められた大澤正男先生と古西信夫先生、また、法学部を停年退職され、新潟県の短大の学長を務められた佐藤進先生、在職中に病を得て、早期選択停年制度を利用された比嘉康光先生（刑法）、退職後ほどなくして他界された落合淳隆先生（国際法）など。他の方々については、小池先生に伺いたいところです。

また、教養部から法学部に分属された方たちで、すでに鬼籍に入られた方々に、川生邦夫先生（体育）、新田良一先生（体育）、教養部長を務められた生駒幸運先生（英語）、菊池清勝先生（英語）、須田洋先生（体育）などが記憶に残るところです。

小池　原秀男先生（法哲学）も、法学部草創期メンバーのお一人で、在職中にお亡くなりになっています。また、立教大の法学部から来られた神島二郎先生（政治思想史）は、定年退職後ほどなくしてお亡くなりになっています。多くの先生方にお世話になりました。

それから、短大の改組から法学部に来られた先生もいらっしゃいます。社会福祉学部が創設されると、法学部は1997年に春日寛教授（商法）と上村淳教授（税法）をお迎えしました。

坂本　そうでしたね、私たちの2年後に、春日先生と上村先生がいらっしゃいました。

早川　私は、入職時の法学部長が清水千尋先生だったので、強い印象が残っています。当時は、清水法学部長で、坂本先生、小池先生、三林先生が主任という時代でした。それに、今いらっしゃる先生だと、鈴木隆史先生が年齢的に比較的近かったので、よくお話しさせていただきました。もちろん、政治学系の岩井昭二先生（政治学原論）、三辺博之先生（政治思想史）とは同じ専門の大先輩という事でいろいろ教えていただいたのですが、大学運営の実務を教わったのは清水執行部の皆様からでした。あらためて今回、坂本先生と小池先生からお話をうかがって、ようやく当時教わったことが腑に落ちるようになった、という部分もあります。これだけ大きな組織を動かしてきたわけですから、簡単な話ではないですよね。また時折でもかまいませんので、お話をうかがう機会があるとよいな、と感じました。今回は、オンライン授業の準備等でお忙しい中、本当にありがとうございました。